

# 「おぼさる」の成立

——宇津保物語を中心に——

田村忠士

尊敬語に接続する、助動詞「る」については、「しばしば注釈書類で人尊敬動詞十尊敬のル・ラルVと解される例のある人思シ召サルV人思シ召サルV型の表現も、人仰セラルVを除けば、その人ル・ラルVは、ほとんどが自発その他、尊敬以外に解することができよう。再検討の必要がある。特に「御覧せらる」は平安時代では、まず、尊敬以外とみてまちがいない。」(国文学・第十七卷第四号・「古典語の構造と識別法」・森野宗明)と指摘され、また「中古の「おぼさる」の「る」は、ほとんどの場合、自発の助動詞である」(旺文社古語辞典・新訂版、「おぼす」の項、とも断定される。本稿においては「おぼさる(おもほさる)」を取り上げ、こうした表現が多く見えはじめる宇津保物語を対象に、その成立事情を考察することに<sup>(注1)</sup>よって「再検討」を試みてみたい。テキストは岩波古典文学大系による。他の作品における引用も同様である。

「おぼさる」という表現の成立事情を考察するには、当然のことながら「る」の意味用法を検討することから始めねばならない。宇津保物語から拾いえた「おぼさる(おもほさる)」の総数は七十九例であった。そのうち、自発の用法とみなしうる「る」が——主観による数のゆれはあるが——過半数以上を占める。また地の文・公話(心話)文における偏りも特に見られず、安定した様相を呈して

いる。ところが、この当時には「思ふ」の自発態の尊敬表現として「おぼえ給ふ」が存する。「おぼえ給ふ」には、

① 大将、いと覚束なくおぼえ給ひければ、万に聞え慰め奉り給ひて、暁にかへり給ひぬ。(⑨・四三六ペ)

② かしこけれど、此の御手こそ右の大将の御手に覚え給へれ。

(⑧・七二ペ)

③ かの国ゆづりのこと、おぼえ給はずや。(⑧・四七四ペ)

④ げに、われこそ父君の恋しくおぼえ給ふに、えあるまじく覚ゆれ。(①・二六三ペ)

のごときものがある。②は「似る」の意、③は「記憶する」の意の他動詞、④については種々の説明がなされているが、此島正年氏のお説に従えば(国語助動詞の研究・一〇〇ペ・桜楓社)、「おぼゆ」の受身表現ともみなしうるものである。これらを除外した①のような用例は宇津保物語に七十例近く見られ、「おぼさる」のそれを数的に大きく上まわっているのである。しかも、

⑤ 中にもこの九の君は、勝れて見え給へば、三の宮は静心なく覚え給ふこと限りなし。見給ひて、物もの給はで、うち嘆きて

立ち給ひぬ。高欄におしかゝりて、詠めおはしまして、おぼすこと更におぼさるゝに……。①・二三五⑤

などによると、例えば敬度の高低といったような両者の用法上の差異もほとんどないものとみてよい。ただ考えられることは「おぼさる」の方が「おぼえ給ふ」に比して発生の時期が新しいということである。このことは、助動詞「る・らる」の進出が中古以降であることを思えば納得されよう。つまり、すでに一語化した「おぼゆ」という、それ自体、自発の性格を有する語のばあいには、「給ふ」を接することによって敬語表現を成立させていたものが、「る」の使用の増大化にもなつて、それ自体、敬意を有する「おぼす」に自発の助動詞を下接する表現法へと変化していったのである。宇津保物語における両者の数上の差はこのような過程を示す一様相としてとらえられるべきであろう。

次に受身表現としての「おぼさる」について考察したい。

⑥ あて宮、見給ひて、あるが中に、いかでと思ひ聞えし人の、あやしき心の見えしかば、つらしとはおぼえ給へしかど、かう心細くの給へること心憂く、など、この君にしもかくおぼされけんなどおぼして、かく聞え給ふ。②・一一二②

⑦ まだ物の心知らざりし時は、人に物聞えず、疎き物と思ひしを、思へば今こそ人に辛しと思ほさるゝはいとほしき心地しけれ。③・一三八⑥

これらは、いずれも「に」を伴う補格を受けており、「る」を受身とすることに問題はないと思われる。ただし、こうした表現は会話

や心話文に多く見られるという傾向がある。

言うまでもないことであるが、前掲の⑥および⑦の用例と、

⑧ 右大将は、公・私にもかしこき物に思はれ給へり。④・三二二⑥

においては、敬意の方向が異なる。前者は、「思は」の尊敬表現、すなわち補格に対する敬意を表わすものであり、後者は「思はれ」の主格に対する敬意の表現である。

⑨ 北方これを聞き給ふに、人にもかくおぼされけりと思ふに、ねたきことかぎりなし。①・一三八⑥

のような、その主体が三人称（ここでは忠こそ）であるばあいは紛らわしいものもあるが、右のように考えるべきである。とすれば、話し手自身を表現の主体とすることの多い会話文において、前者の表現が多く見受けられることは当然である。したがって、地の文においても、

⑩ かくて世にも労ある物におもほえ、つかうまつる帝かぎりなくおぼされてあるほどに、この帝うせ給ひぬ。（大和物語・三三六⑥）

のように、「思はる」の主体が「思ふ」の為手より下位で、しかも尊敬表現の対象とならなければあいの例が見られる。次は会話にのみ見えるものであるが、「思はる」の主体が尊敬の待遇をされる時には、

⑪ 晋が仏、おろかに、この君におぼされ給ふな。①・二五四⑥

⑫ おなじくは殺し給はで、殿にもおしき人におもほされ給はんこそ、命までにはならじ。②・七五⑥

のように、「給ふ」の接続を必要とする。こうした現象は、「見ら

る」に対する「御覽せらるる」、「聞かる」に対する「聞こしめさるる」においても指摘しうるところである。

⑧ うるはしくものしたまふ君にて、三条の宮と六条院とにまゐりて、御覽せられ給はぬ日はなし。(源氏物語・④・四九六)

⑨ 心ぐるしきさまにて、院などにも、聞し召され給はむを、つくるひ給へ。(同・④・三四六)

なほ、受身態の「おぼさる」の成立は、自発のそれとは異っていて、  
⑩ 人には深くつらき物としも思はれぬものぞや。(②・七〇六)  
といった表現において、「思は」が尊敬語「おぼす」に転じた結果であろうと思われる。それは、「思ふ」の自発態としては「おぼゆ」が盛んに用いられているのに対して、受動態としての「おぼゆ」は用例も少なく、「思はる」の表現の方が活発であることから推測されるのである。

尊敬の意の「る・らる」が敬語動詞とともに用いられるのは、「その敬意の度合を増強する」(国文学・第九卷第十三号・「敬讓(含丁寧)の助動詞」・森野宗明)用法だとされる。宇津保物語に於ける「おぼさる」の用例をこの観点から見ると、例えば、

⑪ かくても、おぼす事のかたかるべきを、心ぼそうおぼしつゝ、まうで給ふを、ひちがさ雨ふり、雷ひらめて落ちかゝりなんとする時に、右大将のぬし、三条の北方、頭中将よりも、あて宮にきこえさしてやみなんずる事とおぼすに、涙とゞまらずおぼはさる。(②・六七六)

⑫ 帝、限りなく哀におぼされて、かつは物の変化にやとおぼせど、泪おとさせ給ふこと限りなし。(③・五一五)

⑬ 「……なほ人のあるやうにてあらまほしくおぼされば、さやうにても。わいても、ここに見奉りしやうにてもありきと、なおぼしそ。……」(⑧・二八九六)

のように説明のつかないものが多い。地の文における、「おぼす」の使用対象者は院や帝を始め、尊敬語によって待遇されるほとんどの人物に及んでおり、そこに敬意の低下を見ることはできない。同様に地の文において二十五例ある「おぼさる」の主体も、用例の多寡からくる対象者の範圍の狭さはあるものの、「おぼす」におけるそれとほとんど相違はない。さらに被敬者のクラスに応じて敬意の差を与えることを理由と考えるならば、「る」の添加によるよりも、「おぼす」より敬意の高いとされる(国文学・第五卷第二号・「思す」及びその類語の発生と展開」・松尾捨)「おぼしめす」を用いることの方が尋常だと思われる。事実、用例数は少ないながら後者は地・会話文とも帝・大臣クラスにしか用いられていないのである。宇津保物語において、テキストの不整合によって文意の明確を欠く部分に見られる「おぼさる」を一応除外すると、あるいは尊敬用法の「る」かと思われるものは次の二例である。

⑭ 深き契りを、夜一夜心のゆく限り、し明し給ふも、あひ難からむことを、今よりいみじう、悲しう覺さるゝほどに……。

⑮ 嵯峨の院は忽におぼすやうに、はなやかなることの大将のなきを、なほ飽かずおぼさる。(⑤・五二七六)

前者は、

⑯ 一院、哀なる事を心深くおもほす。御心に、ましてまだきか

せ給はぬ様のいと珍らかに悲しうおぼさるゝに……。 (⑧・五  
一七六)

を考慮すれば、「ヲ」格を受けているところから、尊敬とすること  
も可能であろう。けれども、少数ながら、自動詞の「おぼゆ」が、

② 春宮召さば、かならずまゐらせ給ひなを、いかにせんと、  
おもほえず、心魂まどひさわきて、何の物のけしきをもおぼえ  
給はずなりぬ。 (⑨・一二六)

③ なほ上野の御子などに、思ひおとし給へるをなんねたくおも  
ほゆる。 (⑩・一三六)

のように「ヲ」格を受けていると思われる例がある。よく引用され  
る源氏物語の例、

④ 御覧じだに送らぬおぼつかなさぞ、言ふ方なくおぼさる。

(①・三〇六)

について、此島氏は「上に『おぼつかなさぞ』という目的語がある  
から、一他動詞とし従って『る』は尊敬と見なければならぬ。」  
(前掲書・一一〇頁)とされるが、森野氏は「自発としての解釈が  
成立しないわけではない。」(助詞助動詞詳説・「第二章敬讓の助動  
詞」・森野宗明・学灯社)と述べておられる。氏の根拠は示されて  
いないが、「おぼさる」が「ヲ」格を取ることすなわち尊敬の用法  
であるとは、単純に言い切れない面があるのではないか。

⑤ では、「一見『おぼす』が『おぼさる』と対応していて、両者が  
同一の用法であるかに解されそうである。実際校注者はそのような  
解を示しておられるが、『おぼすやうに』は「なき」を修飾してい  
るのであって、『おぼさる』に応じているのではない。従って『お

ぼさる』の「る」は自発と見るべきであろう。とすれば、「おぼさ  
る」という表現の成立には、尊敬用法の「る」は関与していないと  
いう結論になるが、このことは、「おぼさる」の用例の見られる竹  
取物語・大和物語・蜻蛉日記・落窪物語等においても同様である。  
ただ、「おぼさる」の尊敬態が成立する余地は全く考えられないか  
というところでもない。

⑥ ……上「さらば、ともかくも皆計らひに有るべき事なるを、  
先づと思はれんを誰も〜」と仰せらるれば、源宰相をなし給  
ふ。 (③・二九六)

といった、「る」が尊敬を表わしていると思われる用例において、  
受身態のそれと同様に、「思は」が「おぼす」と換置される可能性  
もあるからである。なほ、可能の用例としては、

⑦ 帝、御覧するに、はかりなく、すべきかたおぼされず。 (①

・三八〇六)

があるのみで——これは自発態の表現とも見なしうる——考察の対  
象とはしなかった。

以上の考察から、「おぼさる」における「る」は、そのほとんど  
が自発であるとは断言できず、受身としての用法のものも存するこ  
とが明かになった。ただ受身の用法は後に「思はれ奉る」といった  
ような表現に移行していったと考えられ(宇津保物語などでは「知  
られ奉る」といった表現は見られるが、「思はれ奉る」はまだ現わ  
れない、源氏物語などでは「おぼさる」の形は減少していたであ  
ることは想像にかたくない。

注1 本文における表記は一部改めた。ページの上に示した数字は大系本の巻数を表わす。

注2 国学院雑誌・昭和三十年三月号・「源氏物語の敬語法一つ——おぼえ給ふ——」・今泉忠義。「源氏物語雑考——「覚え給ふ」の語義——」平安時代物語論考・松尾聡・笠間書院など。

注3 宇津保物語には、「いみじう恐しき人の心かな。何によりかく深く怨ずらん。人くまうのぼらすとにやあらん」とおぼし給ふ。」(⑧・二三四ペ)のような「おぼし給ふ」の表現が七か所見られ、「おぼしめし給ふ」の例もある。けれどもこれらをもつて、「おぼす」の敬意の低下の左証とするには問題がある。あるいは誤写とも、後代の語法の混入かとも思われるが今は断定を避けた。さらに「上、いかでこの内侍のかみを御覽せむとおぼすに、御殿油、物あらはに燈せば、物し。いかにせましとおもほしおはしますに、螢、おほします御前わたりに、三つ四つつれてとびありく。」(⑧・二四ペ)については、小久保崇明氏が「このような『おほします』すなわち、複合動詞の尊敬語を作るもの、および……(て)居る」の尊敬体を、尊敬の補助動詞「給ふ」と同一視することはできない。次元の異なるものだからである。」(大鏡語法の研究続・「第三節尊敬の補助動詞『給ふ』と『おほします』の敬度について」・桜楓社)とされているように、「宮もいとほしとおほし給ひつゝ……」(⑧・一六ペ)における「み給ふ」を「おほします」が担当していると見れば

よいであらう。

注4 森野氏は、国文学(九の一三)において、敬語動詞に接する「る」の用法を「敬意の度合を増強するもの」とされる。そして「御覽せらるる」については、「尊敬表現としての『御覽せらるる』が一般に用いられるのは、『いはる』同様、院政期以降のことである。」(助詞助動詞詳説と考察された。「召さるる」についても、拙稿(解釈・第二十一巻第六号)において同様の見解を述べたことがある。これらのことを考慮すれば、こうした「る」の尊敬用法については時代上の限定が施されるべきであらう。

注5 落窪物語には、「やうやう物思ひ知るまゝに、世の中のはれに心憂きをのみ思されければ、かくのみぞうちなげく。」(四四ペ)の用例があるが、こは底本「おほさなければ」とあって、尊敬態の存したという確証とはしがたい。

(山口県立岩国高等学校教諭)